

結・たより, Vol.8

発行:神戸 : ウイメンズ・シンクタンク・ユイ

1997.7.25. - 8p

請求記号:震災-6-z26

神戸市営真野住宅—シルバーハウジング—を設計して

中川 俱子

友人と会うと「老後がどこで、誰と住むのか」という話題になります。「友人達と住めるコレクティブハウスを建てられたいいね」と話し合っても、今はそれぞれが忙しく、具体的には何もしていない状況です。

1996年の夏、神戸市長田区真野地区に市営住宅を設計しました。デイサービスセンター、地域福祉センター、児童館が併設されている集合住宅です。

住宅部分はシルバーハウジングということで、段差がなく、緊急事態が発生したことを通報する警報機がついています。

住戸数は20戸、敷地面積が1,200㎡、全面道路が4.5mと狭いため、街の中にさりげなく溶け込むように計画しました。コンセプトは次の通りです。

コンセプト

■生活軸の設定

- 真野地区における福祉活動の拠点としての位置づけ。児童館、地域福祉センター、デイサービスセンター等の機能のある施設の整備をし、地域のコミュニティーサービスサポートセンターの役割をします。
- 計画敷地の東隣の南尻池公園と連続するプロムナードを整備します。



■シルバーハウジングの役割

- 震災復興の役割の中心としてシルバーハウジングがあります。今は戸数を多く、住戸規模は

小さいものですが、将来の住まい方も考慮し「可変戸住戸」として二戸一化を図ることも可能な計画とします。

■平面計画

- 道路から各施設へのアプローチがそのまま公園への通り抜けの軸となり、三施設が独立しながらも街や他の施設と自然なかかわりあいがもてるように計画します。

コンセプト（続き）

■デイサービスセンター

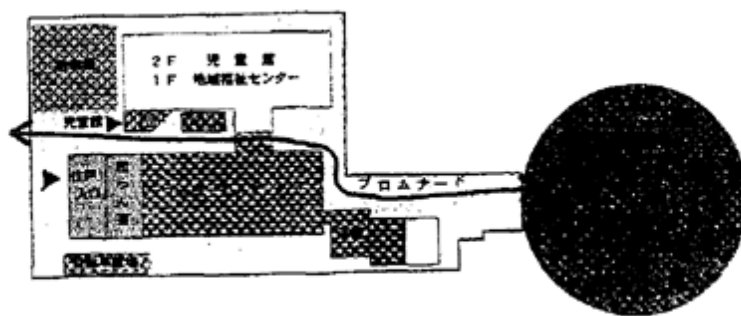
- サービス内容は給食と入浴が主体ですが、密集した街でありながら、センターの室内からの眺められる緑のある庭を全面に配置し、明るく開放的なプランとなっています。
- 地域福祉センターと風除室、便所を共有しているので、そこから相互の交流が生まれれば、より活気のある施設となるでしょう。

■地域福祉センター

- 建具を開け放つと約140平方メートルの一室とすることができます。料理教室を開いたり、給食サービスのできる余裕のある厨房を備え、各種ボランティアの発進基地ともなります。2階に児童館の遊戯室があり、防震・防音には建築的配慮がされています。

■児童館

- ボランティアの控え室が学童保育室の隣に配置され、子どもへの十分なサポートができます。図書室、学童保育のスペースあと遊戯室が事務室を間に東西に配置することで、静と動を分離します。
- デイサービスセンター、地域福祉センターと同じ敷地にあることで、子どもと高齢者の自然な交流が図られます。



この住宅は今年の秋頃、竣工予定です。出来上がったから見学会をしたいと思いますので、是非ご参加下さい。

街の中に20戸から30戸の集合住宅が、安い家賃で次々と出来れば老後は安心ですが現状では、市街地は土地が少なく、その方向には進まずに郊外に大きな団地を作っている状況です。昼間、人の居ない団地は子どもや老人には住みにくく、優しさの少ない街です。さて、どうすれば良いのか…。

健康で友人のネットワークがある間は大丈夫でしょうが、“その先は”と考えると安心できません。「これからの住まい」について、ワイワイと話し合う場を創りませんか？皆様のご賛同を待っています。

ユイのひとびと

暑くなりました。皆さん、お元気でしょうか？久しぶりに「結・たより」をお届けします。「ユイ」は最近、何をしているの？と聞かないで下さい。運営メンバーは“原稿を書かなきゃ！”という気持ちに行動がついて来ず、焦っているところです。

今号では、「ユイ」のひとびとの近況をお知らせします。

☆高橋佳子さん

4月から、ポートアイランドにある神戸国際交流協会に勤務しています。国際会議場、国際展示場、ワールド記念ホールの管理運営と、そこで開催されるいろいろな国際会議、見本市、イベント等を誘致して来るのが私の仕事です。みなさんに、「あなたにぴったりの仕事やわ」と言われて、私ってよほどお祭り好きと見られているのかと思いますが、初対面の人にいきなり「神戸で会議をしませんか」と言うのは、いかに私でも勇気のいることで、それなりに狙いを定めてセールスポイントをアピールしなければならないという、なかなか奥の深い仕事です。

震災後の神戸に活気を取り戻せるのも、人や物が集まってくればこそ。おもしろいイベントをたくさん引っ張ってきますのでみなさん、ぜひポートアイランドに足を運んで下さい。

国際交流協会常務理事 高橋佳子

電話（078）303－0090

* 高橋さんは1990年に、女性で初の港湾局の課長になり、活躍された人です。

☆相川康子さん

3月1日から、神戸新聞社情報科学研究所の研究調査部研究員としてスタートを切りました。新しい職場はシンクタンク兼プランニングを行う部署で、ハーバーランド本社の11階にあります。10年間の外勤記者の経験を生かし、まちづくりや環境、女性そして教育問題など幅広いテーマに取り組みたいと思っていますので、みなさんよろしくお願いします。

* 相川さんは現在、行政の女性政策をテーマに研究レポートを作成中です。

☆中川俱子さん

「アルプラン」中川俱子の設計でユイの会員の宗次康子さん、朴木佳緒留さんの自宅が1996年10月、12月にそれぞれ竣工しました。檜やヒバのフローリング貼りのナチュラルで身体にやさしい住まいです。

宗次さんの住宅は1997年6月20日付神戸新聞で2世帯住宅（寺田宅）として、朴木さん宅は「住みたい家」1997年6月号に、『住吉東の家』として紹介されました。

* 下記の写真は朴木邸。「いろいろ細やかな工夫をしてもらって、すごく住みやすい」と朴木さんは大満足。



☆長谷川京子さん

神戸弁護士会「両性の平等に関する委員会」の委員長として活動中です。「夫婦間暴力」をテーマに1996年6月にシンポジウムを開催、相談先一覧も入ったリーフレットも作成しました。ご活用下さい。



☆川畑真理子さん

神戸新聞の「せいかつエッセー」欄に連載中です。第1回は7月4日『悩みとつきあう』でした。若々しい笑顔で、これからまだ7回ほど登場します。どうぞ、ご注目を！陸田昭子さんも丁度1年前（1996年7月～8月）、この欄に毎回読みごたえのあるエッセーを連載されていました。

☆天川佳美さん

“被災地を花と緑で彩ろう”“ガレキに花を咲かせましょう”（「阪神市街地緑化再生プロジェクト」）の中心メンバーとして大活躍の天川さん、4月から「茶店きんもくせい」の店主（？）に。震災で倒壊した「まちづくり（株）コープラン」の事務所の再建にともない、1F部分を喫茶スペースをもったギャラリー兼地域住民の集会施設、まちづくりにかかわる人々の勉強や研究の場として作られた「茶店」です。宮脇檀さんの設計で（上記イラスト）、とてもしゃれています。

人も車もあまり通らない横道の一角にある「茶店」はフロインドリーブのパイとパン、そしておいしい紅茶と天川さんとのおしゃべりで心に元気がとりもどせる素敵なスペースです。

茶店きんもくせい 電話 (078) 856-3358
開店時間/10:00~17:00 日、祝日休み
(7月26日~8月31日までは夏休みです)



「消費者情報」No. 280 (Apr. 1997) にユイのメンバーの林まゆみさんが書かれた文章を見つけましたので、転載させてもらいました。

住まいは地域に向けて

林 まゆみ

ランドスケープアーキテクト

(神戸芸術工科大学実習指導講師)

未曾有の阪神大震災から2年の歳月が流れた。震災後私たちは、みどりや水の大切さと強さを身にしみて実感した。大勢の人々の命が奪われた廃墟のようなまちの中にもみどりは生き続け、公園の樹木が火災の延焼をくい止めたりもした。また普段豊かに供給され、何も考えずに使っていた水も、限りなく貴重なものとなった。人々は川や井戸から水を汲み上げたり、遠来の地方からの水を感謝しながら受け取ったものである。

私は景観デザインの専門家として被災地の調査やまちづくりに携わってきた。区画整理事業の行われているある地域では、まちの中に縦横にせせらぎを通す案を住民の方と一緒に検討している。せせらぎの道が汚れたときにだれがそうじをするのかといった意見もあるが、それを話し合うのがまちづくりじゃありませんか...という、また別の住民の方の意見でみなのが考えが少しずつ固まっていく。この地域はそのほとんどが震災後の火災で焼けてしまった。目の当たりにする焼けていく我が家、水の出ない消防車。はらわたのちぎれるようなやしい思い。そういう経験がこの地域の人々の水に対する思いを深いものにしている。まちづくりに対しても積極的な方が多い。

これからのまちづくりで、私たちが住居を定めたり建物をつくったりするとき、その地域にどのように関わっていけるかを考えていくことはとても大切だと思う。例えばブロック塀一つとっても、震災後には脆弱（ぜいじゃく）で危険なものとなった。美的にもうるおいのないものだ。ブロック塀のかわりに生き生きとしたみどりの木々が繁り花の咲く生け垣にすれば、自分の住まいだけではなく、地域全体にも随分とうるおいができると思う。

このように形のあるものに限らずとも、人々の心のつながったコミュニティのあるところほど、災害

時の連携や、平常時からの高齢者や身障者にもやさしいまちづくりが可能だ。米国では、建築設計などの専門家も日頃から地域活動をしている例が多いと聞く。日本でも、普段から一般の住民も専門家も、ともに地域の中で暮らし、地域を考えていく住まい方を心がけてゆけば、さまざまな可能性が広がっていくだろう。（はやし まゆみ）

●阪神・淡路大震災被災者への公的支援実現住民投票運動とりくまれる

126氏の呼びかけによる「被災者への公的支援の実現をかさねて訴えるアピール」を受けて、1997年4月20日「阪神・淡路大震災被災者への公的支援実現住民投票運動実行委員会」が結成され、『国は、超党派の公的援助法などの立法化を含め、住宅・店舗の再建に500万円の公的助成をすること被災者の生活支援に350万円を支給すること』の「賛成」「反対」を問う住民投票が始まりました。

投票は数百の自治会・町内会、仮設自治会、商店街、病院・診療所、スーパー、事務所、特定郵便局、私鉄構内、区役所等に投票箱が置かれ、又、街頭でも行われました。ちなみに私は行きつけの歯医者さんでした。街頭投票では10代、20代の若者の参加が多かったようです。

投票期間は4月20日から5月25日までという短い期間でしたが、実行委員会が6月2日付で発表した投票結果では投票者総数は850,199人で、その内賛成票は840,509人でした。1カ月の間にこれだけの人が参加した住民運動は近年にないことです。

神戸市では人口比で26.4%（375,012人）、芦屋市では26.9%（20,087人）が投票に参加したことになります。

5月20日、超党派議員による「被災者等支援法案」が参議院で発議されましたが、通常国会では、「公的支援法」は決議されず、秋の臨時国会まで継続審議になりました。（尼川記）



●本の紹介

「神戸の復興を求めて」神戸大学（震災研究会）編 神戸新聞総合出版センター ¥2,400

大学の研究者たちが震災の現場で、それぞれ専門を連携させて、作りあげた提言集。「経済は復興できるか」「町は復興できるか」「住宅は再建できるか」「新しい都市形成への考察」の4章からなる。被災者と悩みや苦労を共にしながら復興を“研究”する研究者たちの筆に力がこもっている。

◆ウイメンズ・シンクタンク「ユイ」のホームページに アクセスしてみてください

<http://133.30.12.1/~inaba/yui.htm>

ユイのメンバー、稲葉洋子さん（神戸大学附属図書館勤務）が作ってくれました。

神戸大学「震災文庫」のアドレスは

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/eqb/index.html>

(c) 1997ウイメンズ・シンクタンク・ユイ (デジタル化：神戸大学附属図書館)